

〈放送史への証言〉 竹山昭子さん (放送史研究家)

戦前・戦中・戦後を通してみた 体験的放送史

前編：『兵に告ぐ』から『玉音放送』へ

メディア研究部 (メディア史) 加藤元宣

竹山昭子さんは、黎明期や太平洋戦争下におけるラジオ放送の実態解明など、放送史研究の第一人者として精力的な研究活動を続けている。そして、『玉音放送』などの戦前・戦中の歴史的な放送を自ら直接聴取していることが、竹山さんの研究に通底する重要なバックボーンとなっている。また、竹山さんは、戦後の民間放送の創成期、TBSに初めての女性アナウンサーとして採用され、放送番組の制作にも実際に携わった。

聴取者、制作者、研究者というそれぞれの立場から放送に対して深く関わってきた竹山さんに、印象に残った戦前・戦中の放送や誕生間もない頃の民間放送の実情、放送史研究にかけてきた思いなどについて、貴重な体験を聞いた。

今月号では、竹山さんが聴取者として触れた戦前・戦中のラジオ放送の様子についての部分を、前編として掲載する。

竹山昭子 (たけやま あきこ) さん



1928年東京生まれ。日本女子大学文学部社会福祉学科卒業。東京放送 (TBS) アナウンス部勤務を経て、61年にフリーとなる。社会心理研究所 (南博氏主宰) のメンバーとして研究活動を行い、83年立正大学短期大学部で教職に就く。88～97年、昭和女子大学文学部教授。主な著書に、『玉音放送』 (晩聲社、1989年)、『ラジオの時代—ラジオは茶の間の主役だった—』 (世界思想社、2002年) など。

初めての放送体験

—— 最初にお聞きしたいことは、竹山さんにとっての初めてのラジオ放送との出会いについてです。戦前のラジオ放送について印象に残っていることがあれば教えてください。

竹山 私の初めての放送体験は何かというご質問ですが、それは初めて自分でラジオを聴いたという体験ではないのです。

それは何かというと、昭和11(1936)年の2・26事件¹⁾です。事件の勃発から3日目を迎えた2月29日の朝のことでした。私は当時、小学校の1年生でした。その日、東京都内の区立の小学校は、臨時休校で休みでした。私は自分の家の庭で遊んでいました。ものすごい雪が降って、庭には30から40センチぐらいの雪が降り積もっていました。私は赤い長靴を買ってもらったのがうれしくて、それをはいて「スポスポ」と靴の中に雪が入らないように用心しながら、歩くスリルを楽しんでいました。

すると家の中から、ラジオの非常に緊迫したアナウンサーの声が聞こえてきたのです。何だろうと思って、私は家の中へ入ってみました。そうしたらラジオ受信機の前で父と母が、感極まって涙を流していました。私は小学校1年生ですから、何の放送かは全然分かりません。ただ父と母が、受信機の前で放送を聴きながら涙を流している。そういう異様な情景に接して、子ども心にも非常に衝撃を受けました。私の記憶というのは、そのシーンだけなのです。でもずっと後になって、「ああ、あれは2・26事件の例の『兵に告ぐ』²⁾の放送を聴いて、父と母は涙していたのだな」と分かったのですね。

ですから、私のラジオとの最初の出会というものは、私が直接放送を聴いてどう思ったか



ご家族との当時の写真(中央が竹山さん)

はなくて、父と母の涙なのです。それくらい『兵に告ぐ』という放送は、国民にも非常に感動的だった。香椎浩平³⁾ 戒厳司令官の名前を出ている『兵に告ぐ』は、「勅令が発せられたのである。既に天皇陛下の御命令が発せられたのである」で始まるもので、叛乱軍の兵に、お前達は上官の命令を正しいものと信じて活動して来たのであろうが、天皇の御命令によって、皆原隊へ復帰せよと仰せられた。お前達が飽くまで抵抗したなら、それは勅令に反抗することとなり逆賊とならなければならない、と帰順を勧告するものでした。原隊に帰ることを「お前達の父兄は勿論のこと、国民全体もそれを心から祈っている」という内容でした。

『兵に告ぐ』の放送原稿は、戒厳司令部にいた陸軍省新聞班員の久保弘一少佐によって書かれたものです。2月27日には早くも情勢は叛乱軍に不利となり、28日の夜には戒厳司令部から討伐命令が出されます。その間に各軍師団の叛乱を起こした兵の原隊には、「息子を返せ」と兵隊の父や母が心配して押しかけているのです。久保少佐はそれを知って、「お前達の父兄は勿論のこと、国民全体もそれを心から祈っているのである」という一文を入れたのです。私の父や母のように、ラジオ

を聴いている一般の人たちも、「ああ、かわいそうに。何も知らないで国のためにと思ってやっているのに、国賊扱いされるのではかわいそうだ」と涙したのだと思います。



2・26事件(戒嚴司令部)

それはずっと後の60年も70年もたって、今になって初めて私はそれを理解するのです。あのときの涙は何を語っていたのかと。『兵に告ぐ』が人々の胸に強く訴えかけるものであったのは、「今からでも決して遅くないから、直ちに抵抗をやめて軍旗の下に復帰する様にせよ。そうしたら今迄の罪も許される」と、兵の心に寄り添い、かつ、兵の父兄や国民の心情を汲む内容であったからこそ、放送を聴いた多くの人々が感情を突き動かされたのだということが後になって分かりました。

このように、私の初めての放送体験は、放送を直接聴いたというのではなく、ある一つのシーンを子どもが見たというものです。そして、その記憶が後々になって、現在の放送史研究の道へとつながっていったのではないかと、今になって実感しています。

——ご両親が涙を流しているのを見たのは、そのときが初めてですか。

竹山 初めてです。それほど、その当時のラジオというメディアは人々の心に訴える力が強いものだったと思います。

太平洋戦争開戦の臨時ニュース

——その後、日本を取り巻く状況はだんだんと緊迫の度合いを増していきます。そして、昭和16(1941)年12月8日には、ついに米英両国に宣戦布告して太平洋戦争へと突入します。竹山さんは、そのときのラジオ放送について何か覚えておいでですか。

竹山 私はそのとき女学校の1年生でした。昭和16(1941)年12月8日朝7時に臨時ニュースのチャイムが鳴り、「帝国陸海軍は本8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」という館野守男⁴⁾アナウンサーの放送を聴いて、強い衝撃を受けました。

このことがなぜ今でも忘れられないかというと、昭和12(1937)年に日中戦争が始まり⁵⁾、それ以降、日本は中国大陸で泥沼状態になっている。そして、食べるものも着るものも欠乏し、国民の生活がだんだん苦しくなっていることを実感していたわけです。こんな状況の中で、アメリカやイギリスを相手にして戦争を始めて大丈夫だろうか。そういう思いがものすごくあったのです。ですから12月8日午前7時の開戦のニュースを聴いたときには、「日本はこんなことをして大丈夫だろうか」という不安感が強かったですね。

——こうしたニュースに対して、当時の国民の多くは、どのように受け止めていたのでしょうか。

竹山 その当時は、国民の多くがどのように考えていたのか、私には詳しくは分かりませんでした。けれども、戦後になって、当時の新聞や雑誌の投書欄を読みまして、真珠湾攻撃の戦果を伝えたニュースを聴いて欣喜雀躍したという人が少なからずいたということを知りま



放送会館前で緒戦の戦果に聴き入る東京市民 (1941.12.11)

した。

それはなぜなのか。昭和6(1931)年9月に関東軍の謀略による柳条湖事件をきっかけに日本軍の中国大陸への進攻は烈しさを増し、昭和12(1937)年7月、遂に盧溝橋で日中両軍の全面衝突となります。開戦時には、「一撃を与えれば、中国は容易に屈服する」と、陸軍は豪語していたのです。簡単にやっつけられると言われていたのに、昭和14年になっても、15年になっても戦火は収まらないし、作戦のたびにたくさんの日本兵が亡くなる。そして「万歳、万歳」で送られていった身内の人たちが、間もなく白木の箱になって帰ってくる。そういう状況を見ていて、何とか早く戦火を取めてほしいという鬱積したものがあったわけですね。

太平洋戦争が始まったときに、私なんかは不安を感じたのですが、その一方で欣喜雀躍した人がいたのは、それは軍部の大言壮語を信じ、アメリカやイギリスも初戦でやっつければ日本は勝てる。それによって日中戦争も太平洋戦争一当時は大東亜戦争と言いました—もこれで収束させることができる、一気にやっつけしまえ、という気持ちを持っていたのではないかと思います。

戦意高揚に果たしたラジオの役割

—なるほど。それでは、戦争中のラジオ放送の内容について、研究の結果、分かったことなども交えて、お話いただければと思います。
竹山 日中戦争から太平洋戦争にかけての放送で、国民に大きな影響を与えたのは『ラジオ講演』ではなかったかと思います。政府の要人や軍人の演説ですね。

ここに『近代日本と情報』という著書があります。これは近代日本研究会が年報で出している本のうちの一冊です。私はその中に戦時下の『ラジオ講演』をテーマとする論文を載せております⁶⁾。

この論文では、戦争中、政治家や軍人のトップにあった人たちが『ラジオ講演』で演説をしたもののうち、55本を取り上げて分析を行っています。この人たちがどういうことを話したかを、どのような切り口で分析しようかとずいぶん悩みました。

そこで行き着いたのがキー・シンボルの分析という方法でした。これは、演説の中でどういう言葉が何回使われているかをカウントする方法です。

表(次ページ)をごらんください。この分析は、日中戦争が始まった昭和12(1937)年から太平洋戦争の終わり頃の昭和19(1944)年までの期間についてのものですが、この全期間を通して最も頻繁に登場するキー・シンボルは「聖旨」という言葉でした。聖(ひじり)の旨(むね)、つまり天皇のお言葉ということです。「聖旨を奉戴する」、「聖旨に副い奉る」といった使い方をしています。2番目に多かったのが「一億一心」「億兆一心」という言葉です。国民みんなが心を合わせるということを意味します。3番目は

「キー・シンボル」上位13種(昭和12～19年)

		使用頻度
1	聖旨、大詔、勅語	74
2	一億一心、億兆一心、一致協力、官民一体	49
3	東亜新秩序、東亜建設	46
4	御稜威(みいつ)	31
5	国体	23
6	大御心(おおみこころ)	20
7	動員	18
8	共存共栄	15
8	尽忠報国	15
9	皇恩、君恩、聖恩	13
10	臣道	12
11	世界新秩序	11
11	大和魂	11

注) 特定個人が多用した「愛国」「経済ブロック」「隣組」は除外
 ※ 竹山昭子「戦時下のラジオ講演」『年報近代日本研究 12 近代日本と情報』から、一部修正の上転載。

「東亜新秩序」です。アジアに日本を中心とする新しい秩序を作るという意味です。これらが上位3位でした。

この分析作業を行っていった気づいたことは、分析対象とした『ラジオ講演』の中で、「天皇」に関わる言葉、つまり「天皇キー・シンボル」が多く使用されているという事実です。上位13種の中の第1位は、すでに申しましたように、「聖旨、大詔、勅語」です。そして、第4位には「御稜威(みいつ)」、これは天皇の威光という意味です。第5位が「国体」です。これは国民体育大会のことではないですよ(笑)。天皇制そのものを意味しています。さらに第6位が「大御心(おおみこころ)」、第9位が「皇恩、君恩、聖恩」となっています。つまり、上位13種のうち、5つまでも「天皇キー・シンボル」が占めているのです。使用頻度で見ても、上位13種の使用頻度合計は338、そのうち天皇関連は161と約半数を占めています。

これらの結果から言えることは、日中戦争、太平洋戦争中に為政者が国民に向かって行った『ラジオ講演』で、そのキー・シンボルは天皇にまつわるものであったということです。為政者たちは、この戦いは天皇の意志、天皇の命令によるものであることを強調し、その大命に従うことが臣民の道であると説き、日本軍の連戦連勝は「これ一重に御稜威(みいつ)のしからしむるところ」と、天皇の威光を力説し、国民を戦争協力へと駆り立てていったのです。

——戦争継続のため国民を説得するよりどころとなったものが、当時、他にはなかったということなのでしょう。

竹山 そうですね。本当に天皇の威光以外にはなかったと言っているのではないのでしょうか。それはもう絶大でしたね。

これは皆さんもよくご存じだと思いますけれども、軍人や校長先生が訓話をするときに、話している途中で、「本日はかしこくも」と言うと、聞き手は休めの姿勢をしてもパッと「気をつけ」の姿勢をします。「天皇」という言葉が出てくる前に、もう直立不動をしなければいけない。

それから当時の新聞などをご覧になればお分かりになると思いますけれども、文中に「天皇」という活字が出てくるときには、必ず一マス空けてあります。あれは続けてはいけいのです。一マス空けて「天皇」と表記されているのです。

そのくらい天皇という存在は尊いものであり、現人神(あらひとがみ)であると、為政者は国民を教化しました。

——竹山さんは、『ラジオ講演』をお聴きになったことがありますか。そのときは、どのように聴いていたのですか。

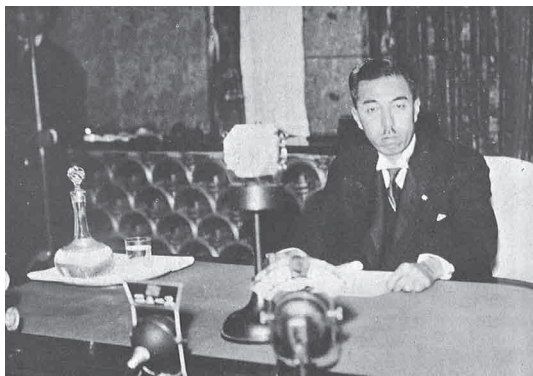
竹山 聞いたことがあります。家のラジオで聴くときはリラックスして聴いていました。「気をつけ」をするのは、公会堂や学校の校庭など公の場所だけです。そうしたときは、演説の場合でも、そこで話を止めるのです。それでみんながパッと直立不動の状態になった段階で「天皇陛下は…」となるのです。ラジオだとそういうことはなかったですね。

——『ラジオ講演』については、どのような放送が行われるのか、何らかの方法で事前に国民に周知されていたのですか。

竹山 例えば、当時の近衛文麿⁷⁾首相の演説が行われるときには、新聞などに「本日何時から近衛首相が…」と掲載されています。また、ラジオでも予告をしています。

特に、昭和13(1938)年11月3日の明治節(明治天皇の佳節)に、近衛首相が「新東亜建設と国民の覚悟」という放送を行ったときは、全国民が聴くようにというお触れが出ていたと思います。学校の式場でこの放送を聴かせるようにとか、ラジオのあるお宅は近所の人々にも聴かせてあげてください、といった内容を放送で告知しています⁸⁾。

戦争中には、隣組⁹⁾というのがありましてね。大事な演説だと、隣組の組長さんから、回覧



ラジオで政府の所見を述べる近衛首相(1938.11.3)

板が回ってきたりして非常に徹底していたと思います。

なお、放送が隣組を動員した例を挙げるならば、『常会の時間』¹⁰⁾というラジオ番組があります。月に1回、午後7時台または8時台に放送されていました。そもそも「常会」というのは大政翼賛会¹¹⁾が先導する国民強化策で、情報局¹²⁾は『週報』などで盛んに宣伝をしています。ラジオの『常会の時間』は、隣組の人たちが組長さんのところに集まって、ラジオ受信機を囲んで政府や情報局の役人の放送を聴いて、その後、お互いに懇談をするというものでした。

『常会の時間』は、隣組単位で放送を聴かせることによって、国の方針を国民に深く浸透させることを目的として設けられた時間です。このようなかたちでも、当時は、ラジオが戦争遂行のために利用されていたのです。

『玉音放送』の研究に取り組む

——その後、だんだんと戦局も行き詰まり、日本は追い込まれていきます。そして、いよいよ敗戦の年、昭和20(1945)年を迎えます。

この年の2月19日にアメリカ軍が硫黄島に上陸し、3月17日には日本軍の守備隊が全滅します。3月9日から10日にかけては東京大空襲が行われ、多くの犠牲者が出ました。4月1日にはアメリカ軍が沖縄本島に上陸し、6月23日に守備軍が全滅するまで沖縄戦が展開されました。そして、8月6日には広島、9日には長崎に原爆が投下されます。また、8日にはソ連が対日宣戦を布告します。

こうした状況に直面し、日本はポツダム宣言¹³⁾を受諾して無条件降伏をすることになりました。そして、このことを広く国民に伝えるた

めに8月15日の正午から放送されたのが『玉音放送』です。

竹山さんは『玉音放送』についての本も出されていますが、そもそも『玉音放送』について研究してみようと思いたれた経緯は、どのようなことだったのですか。

竹山 私は大学の頃から南博¹⁴⁾という社会心理学の先生にご指導をいただいて、その後もずっと南先生が主宰する社会心理研究所のメンバーでもありました。そこから放送研究に入りましたが、研究活動を始めた当初は本格的な研究分野というものを決めていなかったのです。

そのうち、私は、きちんと自分らしい単行本



南博教授

を一つ出した
いなど大それ
たことを考え
たのです。お
恥ずかしいの
ですが、その
とき私が考え
たことを率直
に告白します
と、NHKには

NHK 放送文化研究所(文研)があって、優秀な研究員がたくさんいらっしゃる。予算も資料もたくさんある。そういう人たちと同じテーマを扱っていたのでは、全くかなわないことをよく自覚していました。ですから、文研の方々がやっていないテーマを見つけなければいけないと思いました。

では何があるのか。そこで気がついたことは、「NHKの文研の方々がやっている研究テーマは、放送の現在と未来に重点が置かれている」ということです。放送というメディアは技術革新と非常に深い関係があるものです。従って、

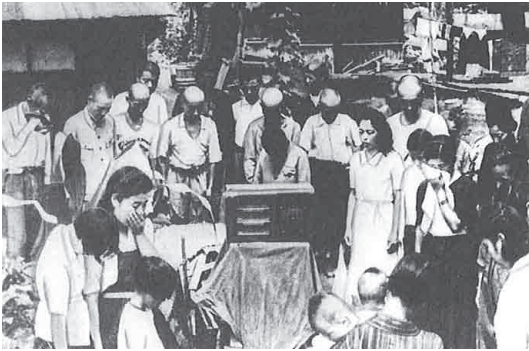
放送技術が新しくなるにつれて、放送のありようはどんどん変化していきます。そうなると、放送についての研究というのは、どうしても未来志向になるわけです。

では、私は過去を振り返ろう。過去の放送の歴史をやろうと決めたわけです。そして、日本の放送の過去を探るに当たって、まず何をテーマにしたら良いかを考えたのです。そこで、これまでの放送の歴史の中で重要であり、最も影響力があった番組は何だったのかと、あれこれ考えました。その結果、それは昭和20(1945)年8月15日の終戦を告げる昭和天皇の詔書である『玉音放送』だということに行き当たったのですね。

『玉音放送』というのは、国の運命と放送が密接に関わったものでした。そして放送が関わることによって、日本は太平洋戦争の終結に当たってそれほどの混乱も起こさずに収束させることができたのです。とするならば、放送が持つ力、影響力という点から考えると、これまでの放送の歴史を振り返ったときに、『玉音放送』が最高の位置にあるものだ、それ以外にはないということに私は思い至ったのです。じゃあ、私は『玉音放送』をやろうというわけです。いとも簡単な理由です。

——竹山さんは、『玉音放送』が当時の国民に強い影響を与えた理由について、どのようにお考えですか。

竹山 『玉音放送』がなぜ大きな力を持ったのか。それは天皇が自ら放送をしたということに尽きるわけですが、そこには一つの前提があるのです。それは、戦前において、現人神である天皇の声を国民に聞かせることがタブーとされていたことです。だからこそ、「玉音」を電波に乗せることによって生じた効果には絶



街角で玉音放送を聴く人々(1945.8.15)

大なものがあつたのです。

戦後書かれたたくさんの「8・15体験記」には、「ガーガーという雑音の中から天皇の声がトギレトギレ聞こえてきて、何と言われたのかわからなかった」という書き方をしたものが非常に多くあります。それにもかかわらず日本国民は敗戦を平静に受け入れ、マッカーサー¹⁵⁾に「かくの如く平穩に、またかくの如く迅速に武装解除が行われたことは史上にその類を見ない」と世界に向けて放送させています。

このように、天皇が何と言ったか分からなかったが国民は敗戦を受け入れたということは、天皇が国民をどのように説得したかという詔書の内容ではなかったように思われます。そうではなくて、天皇のナマの声がラジオで放送されたという事実によって、日本国民は敗戦を受け入れたということになるのではないのでしょうか。

戦前における「玉音」の封印

——戦前には、ラジオなどを通して、天皇の声を国民に聞かせることがタブーであったとのことですが、それにはどのような経緯があつたのですか。

竹山 昭和3(1928)年12月2日に、昭和天

皇の御大典にちなんで陸軍の観兵式が代々木練兵場¹⁶⁾で盛大に行われました。この式は、3万5,000人も兵士が参加し、大量の軍馬や飛行機のほか、戦車、高射砲、自動車牽引重砲などの新兵器も動員されるといった、陸軍始まって以来の大ページェントでした。

この観兵式の模様を、東京中央放送局は2日の午前8時20分から11時28分まで、場内に3個のマイクロホンを設置して、全国に実況放送しました。

閱兵や分列行進などが終わり、いよいよ式も大詰めを迎え、天皇が参列している軍人たちに勅語を賜ることになりました。このとき、天皇の勅語は放送しないという監督官庁の方針でやっていたので、天皇の前にマイクロホンは置かれていませんでした。

ところが、天皇の声がラジオを通して全国に放送されてしまったのです。それはなぜかという、場内の音を拾うために何十メートルと離れたところにマイクロホンが設置してあつたのですが、それが勅語を朗読する天皇の声を拾ってしまったのです。これはアクシデント、全く予期せぬ出来事だったので。

これは、ずっと後の戦後になって明かされたことなのですが、そのとき中継を担当していた技術者は天皇の声が聞こえてきたというので、そこで思わずボリュームをピュッと上げているのです(笑)。「突差に中継線に挿入されていた減衰器を全部抜いた」¹⁷⁾と告白しています。当時、そんなことを口にしていたらとんでもないことになっていたでしょう。

天皇の声が放送で流れたことを、当時の国民は非常に歓迎しています。その翌日の「東京朝日新聞」「東京日日新聞」を見てみますと、記事の中で天皇の声がラジオによって伝えられた

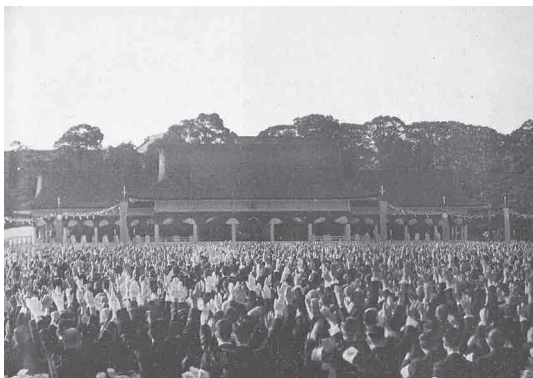
ことを「大成功」と書き、「畏れながら居ながらに拝聴するを得」たことは「未曾有の光栄」であったと述べています。

けれども、観兵式の実況放送が行われてから3日後の12月5日に、通信省が「今後、天皇の声を一切放送してはいけない」という内容の通達を出します。この段階をもって、天皇の声は封印されてしまったのです。こうした通達が出された背景には、神である天皇の声を「居ながらに拝するのはあまりに畏れ多い」とする当時の宮内省・通信省の意向があったのです。

——その後は、どうだったのですか。

竹山 それからずっと天皇の声を放送に出しておりません。例えば、昭和15(1940)年11月10日に、紀元二千六百年式典¹⁸⁾が皇居前広場で行われ、2600年を祝う天皇の勅語が出されました。このときの中継放送を聴いていた小学生の作文には、次のようなことが書いてあります。「宮城前からの紀元二千六百年式典の放送を聴いていた。司会者が『天皇陛下のお勅語です』と言った途端に、放送が止まってプツリと無音になった。少しして、また放送が始まった」。そのくらい嚴重に、天皇の声が発せられるときにはマイクロホンが切られていたのです。

昭和3(1928)年の段階で封印された天皇の



紀元二千六百年式典(1940.11.10)

声は、昭和20(1945)年8月15日正午まで開封されることはありませんでした。『玉音放送』によって天皇の声が開封されたということが、放送の効果を高める上で非常に意味があったと考えていいと思います。単に天皇がラジオで話をしたというだけではなく、それまでずっと無音であったという背景があったからこそ、あれだけ絶大な効果があったということです。これも歴史が言わせることではないかと思えますね。

私が聴いた『玉音放送』

——それでは、竹山さんは、『玉音放送』を、ご自身ではどのようにお聴きになられたのですか。

竹山 実は、私は『玉音放送』の2日前の8月13日に、終戦を知っていたのです。なぜ私が知っていたかという、当時、私の家の2階に陸軍の参謀本部に勤める藤原さんという将校が下宿していたのですが、13日の深夜、目を真っ赤に泣き腫らした状態で帰ってこられました。そして「もう日本は負けました。終戦です」と私と母に伝えたからです。私は8月15日を待たずに、日本が負けたということをそのときに知りました。

ですから、私は、8月15日の『玉音放送』を、衝撃を受けるというよりは、わりと平静に聴いたのです。それでは、その内容が理解できたのかというと、あれは漢語が多用されていて、内容はそれほどよく分かりませんでした。でも、これが終戦を告げる天皇の詔勅であるということは、了解できました。

——『玉音放送』をお聴きになってから、何をなさったのですか。

竹山 その日、私は家で放送を聴きました。私の通っていた女学校は軍の被服工場となって軍服の修理をしていたのですが、5月に空襲で焼失したため、自宅におりました。

私は、『玉音放送』を聴き終わるとすぐに一人で、靖国神社に向かいました。なぜ靖国神社に行ったかという、「戦争のためにたくさんの命が失われたのに、戦いに敗れ、あなたがたの死が無駄になってしまって申し訳ない」という気持ちが非常に強かったからなのです。

8月15日は、真っ青な空から真夏の太陽が照りつける暑い日でした。市ヶ谷の駅を降りて靖国通りに出ると、ちょうど三宅坂のほうから兵隊が乗った陸軍のトラックが士官学校のほうに帰っていくところでした。靖国神社に向かう途中の街路樹は焼けただれていて、根の部分しか残っていませんでした。

靖国神社の拝殿の前に行くと、お参りしている人の多くは私と同じような勤労働員の中学生、女学生でした。動員先の軍需工場などで働いていた人たちが、『玉音放送』があって、「もう作業しないでよろしい、帰りなさい」と言われて家に帰る途中、靖国神社に立ち寄ったという感じでした。そういう人たちが拝殿の前で、み



靖国神社拝殿前でぬかずく人々 (1945.8.15)

んなぬかずいているのです。ぬかずいて、「申し訳ありませんでした」と言っているのですね、例外なく。あなたがたの死が無駄になったことへのお詫びという気持ちが、靖国神社に行かせた。これは当時の軍国少年、軍国少女であった私たちの年齢の者にとって、共通の思いだったと言っていいのではないのでしょうか。

——終戦の日には、皇居前広場にも多くの人たちが集まっていますね。こうした人たちも靖国神社の人たちと同じような心情を持っていたのでしょうか。

竹山 皇居前広場に行った人たちというのは、「私どもの力が至りませんで、戦いに敗れ申し訳ありません」と、天皇陛下へのお詫びの気持ちが強かったと思います。



皇居前広場に集まった人々 (1945.8.15)

このように、『玉音放送』を聴いた後、皇居前に行った人と靖国神社に行った人とに分かれるというのは興味深いことです。いずれも「申し訳ありませんでした」と頭を下げるのですが、一方は「天皇陛下」へのお詫びであり、もう一方は「戦死した将兵」へのお詫びなのです。

——当時の国民の間には、ある種の連帯感みたいなものが存在していたのでしょうか。

竹山 そうですね。それは満州事変¹⁹⁾から日中戦争・太平洋戦争の15年間、政府・軍部の

掲げるスローガン「挙国一致」「一億一心」「尽忠報国」は骨の髄に沁み込むほど聞かされ、記憶されるものとなっていましたから。

—— お話をお聞きして、国民の間にも、戦争に対するさまざまな受け止め方があったのだということを感じました。

竹山 戦時でも物事がある程度理性的・客観的に見ることができた人は、心の中では「こんな戦争をやっていていいのか」「鬼畜米英」「大東亜共栄圏建設」などと、夜郎自大なことを唱えていていいのか」と考えていたのです。ただ、それを口に出すと大変なことになるので言わなかったのですけれども、そういう思いはあったと思います。

ところで、今回私がお話した2・26事件のときの『兵に告ぐ』の放送と、終戦のときの『玉音放送』の二つは、放送メディアの歴史から見て、共通の性格を持っています。それは、この二つは「こういうことがありました」と、情報として伝えたものではなく、放送自体が状況を作り出したという点です。ただし『兵に告ぐ』は、一部の兵を説得するのに軍が公共の電波を使ったという点が問題ではありますが…。

叛乱兵に帰順をうながす『兵に告ぐ』、国民に戦争終結を告げる『玉音放送』、いずれも放送が現状を転回させ、日本の歴史を作り出していったのです。

—— 竹山さんは、人生の中で最も多感な時代を、戦争という重い現実とずっと向き合って過ごされてきたのですね。お話をお聞きしていて、本当に胸に迫るものがありました。そして、そうした厳しい時代状況の中にあって、ラジオがそれぞれの歴史の転換点で非常に大きな役割を果たしてきたということもよく理解できました。貴重なお話をお聞かせいただき、ありがと

うございました。

なお、この後は、引き続き、竹山さんに戦後の民間放送局でのご体験などについて、お話をお聞きます。

(2011.6.21)

(かとう もとのり)

(後編は、2012年1月号に掲載予定)

注：

- 1) 昭和11(1936)年2月26日未明に、陸軍の皇道派青年将校が起こしたクーデター未遂事件。叛乱部隊は高橋是清ら政府高官を殺害し、永田町周辺を占拠したが、29日に帰順した。
- 2) 昭和11(1936)年2月29日午前8時48分から東京ローカルで放送。担当は中村茂アナウンサー(なかむら・しげる、1901～1978)。
- 3) かしい・こうへい、1881～1954、軍人、陸軍中将。2.26事件では戒厳司令官として叛乱軍鎮圧に当たったが、もともと皇道派であったため、事件後待命、予備役となった。
- 4) たての・もりお、1914～2002、NHKアナウンサー。終戦時には、陸軍将校から戦争継続を放送させるとピストルを突きつけられたが、他の職員と協力し放送させなかった。
- 5) 昭和12(1937)年7月7日、中国・北京市の南西約15kmにある盧溝橋で、日本軍と中国軍が衝突し、これをきっかけとして日中戦争が始まった。
- 6) 竹山昭子「戦時下のラジオ講演」『年報近代日本研究12 近代日本と情報』(1990年11月、山川出版社) p.234～258
- 7) このえ・ふみまろ、1891～1945、公爵、政治家。日中戦争期に3次にわたって首相を務め、新体制運動などを推進した。戦後戦犯に指名され、出頭日直前に服毒自殺した。
- 8) 「近衛首相の放送に関するおしらせ」『放送』第8巻11号(1938年11月、日本放送協会) p.19

～ 21

- 9) 戦時体制における国民生活の基盤となった隣保組織。昭和15(1940)年に内務省の通達により制度化された。国民に対する指導や統制、動員の強化を促す役割を果たした。
- 10) 昭和16(1941)年7月1日に新設。放送局が司会する形式で全国140万の隣組が一斉常会を開催した。以後、原則月1回編成され、昭和19(1944)年末まで放送が続いた。
- 11) 昭和15(1940)年10月12日に、近衛文麿を中心とした新体制運動を基に結成された国民統合組織。太平洋戦争進展に伴い、次第に国民統制機関としての性格を強めていった。
- 12) 昭和15(1940)年12月6日に、戦争に向けた情報宣伝活動や言論統制の強化を目的に設置された内閣直属機関。戦時中の思想統制に重要な役割を果たした。
- 13) 昭和20(1945)年7月26日、日本に無条件降伏を要求した米英中3国の共同宣言。13項目からなり、軍国主義勢力の除去や平和政府樹立までの日本占領などを明記している。
- 14) みなみ・ひろし, 1914～2001, 社会心理学者。日本女子大学教授, 一橋大学教授などを歴任。日本における社会心理学のパイオニアで, 思想の科学研究会などで活躍。
- 15) 1880～1964, アメリカの軍人, 陸軍元帥。戦後, 日本の占領政策を実施した連合軍の最高司令官。1951年, 朝鮮戦争の作戦方針を巡りトルーマン大統領と対立し解任された。
- 16) 明治42(1909)年設置。戦後, 連合軍に接収され, 兵舎・家族宿舎などからなる在日米軍施設・ワシントンハイツが建設された。その後, 日本に返還され, 現在は代々木公園, NHK放送センターなどとなっている。
- 17) 齋藤健太郎「放送技術今昔譚」『NHK放送文化』(1950年3月, 日本放送協会) p 20～21
- 18) 日本書紀の神話に基づくと1940年は日本の紀元(皇紀)2600年に当たった。天皇, 皇后をはじめ全皇族, 文武百官, 外国の大公使らが出席, 一般参列者5万余を集めて記念式典が行われた。
- 19) 昭和6(1931)年9月18日, 中国・奉天の北方8kmの柳条湖で, 関東軍参謀らが満鉄線路を爆破。関東軍は中国軍の所為として軍事行動を起こし, 満州事変が始まった。